

関西学院大学名誉教授 細川正義

## 第23回 眞の「コミットメント」を求めていく 村上春樹

— 『蜂蜜パイ』が示す〈新しい出発〉 —

一九七九年に『風の歌を聴け』でデビューして以来「喪失」から「回復」へのテーマで問い続けたきた村上春樹文芸は一九九四年、一九九五年の『ねじまき鳥クロニクル』で、これまでは対置的に、むしろ恐れる存在としてとらえて来た「闇」の世界を封印することで一つの転換を迎えた。春樹自身、『ねじまき鳥クロニクル』第三部発行の翌年『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』（岩波書店）の中で、「コミットメント」ということについて最近よく考えるんです。（中略）以前はデタツチメントというのがぼくにとっては大事なことだったんですが」と述べている。このことが示すように、『ねじまき鳥クロニクル』以降は、「闇」と「現実」、「過去」と「現在」というパラレルワールドを取り入れながらも、問いは「喪失」の「過去」との対峙ではなく、「現実」におけるコミュニケーションの回復であり、「デタツチメント」から「コミットメント」への転換に比重を置いたテーマで展開されるようになっていると言えるのであるが、そこに未曾有の出来事であった地下鉄サリン事件と阪神淡路大震災が大きく影響を与えていることは多く指摘されてきている通りである。その中で、大震災の直後である一九九五年二月に時間を設定して、総題を「地震のあとで」として「新潮」の一九九九年八月号から十二月号まで連載され、最後に『蜂蜜パイ』を加えて翌年二月に発行された短編集『神の子どもたちはみな踊る』は、村上文芸の展開においてその転換を明確に示した作品として注目されている。中でも、『神の子どもたちはみな踊る』発刊時に書き下ろされた『蜂蜜パイ』はその新しい出発を明示した作品として注目されている。

作品は、淳平が小夜子の娘沙羅に、蜂蜜を売っている熊のまさきちの物語を聞かせることから始まる。沙羅は、神戸の地震をニュースで見てから、毎晩のように「地震男」が、沙羅を起こしに来て、小さな箱の中に入れてようとする夢を見て、悲鳴を上げて目を覚ます。その夜は怯えがひどいので小夜子は淳平に来てもらい、淳平が熊の作り話を聞かせているのである。淳平と小夜子は大学入学後間もなくからの友人で、高槻を含めた三人で大学時代ずっと行動を共にしていた。大学卒業後、高槻は小夜子と結婚し、淳平は作家になったが、三人は関係を継続していた。沙羅が二歳の時、小夜子と高槻が協議の末に離婚した。離婚した時の了解事項が週一度は高槻は娘沙羅に会いに行くことと、その時にはできるだけ淳平が同席することということであった。その或る日の帰り道高槻が、淳平に「どうだい、小夜子と一緒にするのはいやか？」と言いだした。淳平はそれに対して、「小夜子は世界でいちばん素晴らしい女だと、沙羅が生まれた夜に僕にはつきり言っただろう。覚えてるか？ 何ものにも替えがたい女だつて」と言い、高槻は、「それは今でも同じだ。それについては何も変わつてないと思う。しかし、だからこそうまくいかないということだつて世の中にはあるんだ」と答え、更に「お前には永久にわからないよ」と告げた。

そのことがあつてから、淳平は小夜子との結婚を真剣に考えるようになるが、最後の一步が踏み出せないでいた。そして、スペインへ取材に行っている時に、淳平の故郷である神戸が大地震の被害にあう。東京に帰った淳平は、地震によって生活が確実に変わったことを実感する。作

品は初めの時間に戻り、淳平は「地震男」の悪夢に苦しむ沙羅を癒すために、小夜子と三人で上野動物園に熊を見に行く。そこで淳平は熊のまさきちの友達とんきちの話をする。その夜、淳平と小夜子は、初めてのセックスをした。そこに沙羅が入ってくるが、その瞳は空白だけを見つめ「地震のおじさんがやってきて（略）みんなのために箱のふたを開けて待っているからって。」と言った。その夜、淳平は小夜子との出会いから現在までを振り返り、夜が明けたらプロポーズすることを決意する。淳平の頭の中には、沙羅に話すとんきちの新たな結末、とんきちがまさきちの集めた蜂蜜を使って蜂蜜パイを焼いて、彼等は山の中で幸福に親友として暮らしたという終わりを考えた。そして彼自身もこれまでとは違う「光の中で愛する人々をしっかりと抱きしめる」小説を書くこと、そして何より二人の愛する女性を守ることを心に期するのである。

作品のポイントは、淳平が小夜子の娘沙羅に話す熊のまさきちとんきちの話と、淳平、高槻、小夜子の三人が歩む大学一年生の時から三六歳の現在までの時間である。淳平は大学卒業後短編小説家になり、現在は三五歳の時に出した四作目の短編集が「中堅作家のための文学賞」を受け、短編作家としてかなり評価されるようになっていく。その彼の創作の一つとして、沙羅に話すまさきちとんきちの話が示されていると捉えることもできよう。その熊の話は、始めから示すところである。まさきちは蜂蜜とりの名人で、余った蜂蜜を町に売りに行くほどだった。まさきちはお金を計算できたり、人間の言葉をしゃべったりできて普通の熊とはちがう能力をもっていた。しかしそれがため他の熊から「煙つたが」られ、とりわけ乱暴者のとんきちから嫌われ、ずっと友だちがいなかった。一方とんきちは鮭捕りの名人で、食べきれないくらいの鮭を捕ったが、人間の言葉がしゃべれないので町へ売りに行くこともできなかった。ある時、二頭はお互いに余った「鮭と蜂蜜を交換」するようになり、親友になった。しかし、ある日から鮭が川から消え、交換することができなくなったとんきちはまさきちから別れて山を下りて行った。淳平は、動物園では、その結末を山を下りたとんきちが猟師に捕まえら

れ動物園に送られたと話した。

一方淳平は小夜子と初めて二人で過ごした夜、沙羅の「地震のおじさん」が夢の中に現れた話を聞いた後、独りで一九歳の大学生の時に小夜子、高槻と出会った頃からのことを回想した。かつて小夜子は淳平に対して「いろんなものを与えてくれる」ことを認め感謝しながらも、結局彼を選ばないで高槻と結婚していき、その後親しくなった恋人も「ほかの場所に本物の温もりを求めて離れていった」ように、これまでの淳平には他者に対しての何かが欠けていたことを推測させる。実は、学生時代、淳平は小夜子を愛し、小夜子も淳平に惹かれていた。「お前には永久にわかないよ」と淳平に告げた高槻の言葉は、二人の気持を知りながら小夜子との結婚を求めたことからくる寂しさだったと言える。一方、淳平は「小夜子との関係は、そもその最初から一貫して、ほかの誰かの手によって決定されていた」と振り返るように、自分からは小夜子にも他者にも関わりを深めるための積極的な行動はしてこなかった。その夜、淳平は改めて「人生という長丁場を通じて誰かひとりを受し続けることは、良い友だちをみつけるのとはまた別の話なのだ」ということに気付く。まさに、人生のかけがえのない隣人を得ることへの新たな意識の持ち方と主体的な実行の必要性を自覚した姿を描いていると言えるのであるが、ここには村上春樹が「ねじまき鳥クロニクル」以降、「現実」におけるコミュニケーションの回復を小説のテーマとして意識してきた姿勢が明確に示されていると言うことができる。

熊の話を、二頭が協力して蜂蜜パイを焼くことを覚え、その共同作業でできた「蜂蜜パイ」が絆となつて、それからは親友として幸福に暮らしたと結び、小夜子に対しても「たとえ空が落ちてきても、大地が音を立てて裂け」る様なことが起こっても護りぬかなければならないと決心する。これからの小説もその気持ちベースにしてこれまでとは違ったものを書こうと決心して閉じる作品はまさに、阪神淡路大震災という未曾有の災害を経験したことを礎にして現実においての真の「コミットメント」を求めて始動していった力強さを確認させるのである。